

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03109

研究課題名(和文)戦後における柳田民俗学の組織的再編に関する基礎的研究 1945～1949

研究課題名(英文)A Basic Study on the Systematic Reorganization of Yanagihita Kunio's Folklore in the Postwar Period 1945-1949

研究代表者

鶴見 太郎 (Taro, Tsurumi)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80288696

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：組織としてみた場合、戦後の柳田民俗学は比較的早く活動を再開している。他の学術機関が敗戦によって他の東アジア諸国をはじめ、国際的な学術交流が途絶したのに対して、柳田民俗学はその影響をほとんど受けなかったことが理由の一つである。加えて戦時下において柳田の民俗学が実証に基礎を置く従来の研究方法を維持したことが大きい。しかしながら1949年「民間伝承の会」が学会として再編されるにあたり、組織としての柳田民俗学はこれまでのアマチュア性を次第になくしていくこととなる。その意味で柳田民俗学の変化は戦時中よりも、戦後の方が大きいといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後に到る柳田国男の思想、柳田民俗学の影響力をその組織的な広がりとともに検証した。日常の持つ不易性という主題を戦中から柳田が保ち続けたことは、占領下の社会変動に対しても同様の視点からこれを捉える素地となった。一方で、戦中においてそれら実証主義を貫いた柳田の組織は、戦後新たに学会組織として再出発する中で、初発の民間学としての性格を後退させてゆくこととなった。これらの経緯を評伝『柳田国男 感じたるまゝ』(ミネルヴァ書房)所収の戦後に関わる部分として吸収し、2019年9月に刊行した。

研究成果の概要(英文)：As an organization, Yanagihita's folklore after the war resumed its activities relatively early. One of the reasons is that Yanagihita's folklore was hardly affected, while other academic institutions were disrupted by the defeat in the war. In addition, during the war, Yanagihita's folklore maintained the conventional research method based on the demonstration. However, in 1949, when "Folklore Society" was reorganized as an academic society, Yanagihita's Folklore gradually lost its amateurism as an organization. In this sense, it can be said that the changes in Yanagihita's folklore were greater in the postwar period than in the wartime period.

研究分野：日本近現代史

キーワード：柳田国男 郷土 民俗 民間伝承の会 橋浦泰雄

1. 研究開始当初の背景

柳田民俗学は、1930年代から戦時中にかけて飛躍的に組織化された。組織化に成功した理由として、地道に民俗事象の採集、およびその比較総合を基調とする柳田方法が各地方に散在する郷土史家へ浸透し、彼らが柳田の理解者となったことが重要である。昭和初年における連続講義『民間伝承論』、或いは民俗学の入門書『郷土生活の研究法』など、柳田自身が民俗学研究法を確立して平易な形でそれを刊行したことを経て、定期的開催される民俗学講座によって、郷土史家のみならず、一般市民にも民俗学普及の道がひらかれていったことが背景としてあったといえる。

申請者は過去十数年にわたり、継続して採択された4件の科学研究費補助金(いずれも基盤研究(C)、代表者・鶴見太郎)によって、柳田民俗学の組織化の実態を、時期的に区分しながら検証してきた。その際、主として依拠したのは、1920年代半ばから柳田国男に師事し、以後、一貫して柳田民俗学を組織面から支えた『民間伝承』編集長・橋浦泰雄の残した文書(「橋浦泰雄関係文書」以下、「文書」と略記。)だった。「文書」には大正末から1950年代初頭まで日本各地から寄せられた書簡が系統的に保存されており、未公開のものをふくめ柳田国男宛ないし「民間伝承の会」宛のものを数多く収めている点で、柳田民俗学の組織化の実態を知る上で、貴重な資料といえる。

申請者は過去10年にわたり継続して行った研究において、書簡と学会・機関誌運営資料を中心に、それぞれの時期におけるデータ・ベースを構築した。本研究は、そのデータ・ベースを活用し、これまでに申請者が行った4件の科研費による研究を総合して、柳田民俗学の組織化の実態について、その「完成点」ともいえるべき、敗戦直後に照準を合わせて基礎資料から考察することを主眼としている。

敗戦直後から日本の論壇、学界においてはR.ベネディクト『菊と刀』に代表されるように、欧米の社会学、文化人類学が圧倒的な影響を誇ることとなるが、柳田民俗学はそれに対して従来の経験的思考を守りながら対峙した。この点から見ても、柳田民俗学の不易性、独自性は動かしがたい事実である。本研究はそれを支えた組織「民間伝承の会」が最終的に日本民俗学会へと再編される1950年前後までを対象として、敗戦後数年間の柳田民俗学の実態を検証するものである。

2. 研究の目的

柳田民俗学が組織的に基盤形成を遂げていく実態について、基礎資料の収集・分析から明らかにすることを目的とする。具体的には、1)柳田が主宰した雑誌(『民間伝承』)の購読者たる地方の郷土史家をどのように組織化したのか、2)組織化の対象となった地方研究者は雑誌の購読によってどのような知見を得たか、3)組織化の拠点となった地域でどのような活動が展開されたのかを検討する。

時期的には柳田が雑誌『民間伝承』を通じて全国的に民俗学の浸透を図り、全都道府県に「民間伝承の会」会員が在在するという意味で組織化に成功した1945年から、最終的に同会が日本民俗学会へと再編される1950年前後までを対象とする。その上で、4)通史的に捉えた柳田民俗学の組織化の過程が日本近代思想史上、どのように位置付けられるかについて、基礎資料とともに検証する。

柳田国男が自ら主宰した雑誌は『郷土研究』、『民族』、『民間伝承』であるが、研究者の組織化と連動し成功を収めた点で、『民間伝承』は画期的な役割を果たした。この点を踏まえて、「民間伝承の会」が戦後、1950年日本民俗学会として再編されるに及んで、ひとまず柳田が組織運営の第一線から退くまでの期間、各地の郷土史家、一般購読者がどのように柳田によって発信される研究上の言説に反応し、それを自身の住む場所へと還元して地元で活動を行う際の指針としたのかを考察した。

「橋浦泰雄関係文書」(以下、「文書」)における主だった郷土史家、学会・機関誌運営に関わる資料については、データ・ベース化が終了しており、先述した対象期間については大正前期から終戦直後までがほぼ、検索可能な状態にあった。従ってこれまでにそれぞれ構築したデータ・ベースを適宜参照しながら、長いタイムスパンで柳田民俗学が組織化されていく過程を検証した。その際、これまで各時期で独立性が強かった個々のデータ・ベースを、郷土史家、各地域の研究会(特に信州東筑摩郡、鳥取、大阪、京都、新潟など)、地域を超えて比較的長期にわたって継続的に行われた事業など、相互に関連する事項とともに、各々を連結させながら補正を行った。

柳田民俗学とは、各地の郷土史家に対しこれを民俗採集に従事させ、その分析は柳田国男とその弟子たちが行うという地方中央、弟子師匠という従属関係を持っており、その点で、「一将功成万骨枯」の学問(岡正雄)とされるが、「文書」を始めとする同時代の資料を子細に検討すれば、各地域の郷土史家も他の地域の郷土史家に触発される形でこれに参画したと考えられる。以上の点から、本研究は地方を従属的に扱ったとされる柳田民俗学への批判に対し、資料的な基礎を踏まえた反証を提示しようとするものである。十全な基礎資料の分析をもとに、民俗・郷土を媒介とする人的関係の構築を捉えようとしている点で、新しい領域における研究成果への展望を含んでいる。

3. 研究の方法

柳田民俗学の人脈構成について、これまで構築したデータ・ベースを使い、敗戦直後から1950年まで通史的にその動態を考察した。研究方法としては、「橋浦泰雄関係文書」(以下、「文書」)所収の書簡の基礎的な解読、『郷土研究』、『民族』、『民間伝承』の編集に関わる資料の解読、前の2項目に基づいた地方への実地調査。全体を総合した通史的な意味付け。以上の4項目を主軸とするが、これに加え、として、今まで分析が手薄だった敗戦直後から5年間、すなわち戦後における「民間伝承の会」の活動実態を会員の動向を中心に「文書」から明らかにした。

具体的にについては、「文書」の中から重要と見られる郷土史家の書簡のうち、既にスキャナーでパソコンに保存してあるもの約200名分(合計約1200通)の中から、さらに重要と判断される郷土史家を抽出して、それら書簡の解読を行った。仕事内容としては、主として(1)画像の拡大印刷、(2)書簡の日付チェック、(3)解読した書簡(ワードによる)のパソコン入力などである。

については同様に(1)既にパソコンに保存してある画像資料で重要と判断されるものを拡大印刷して保存する。及び(2)それに簡単なキャプションを付けて保存用封筒に保管する作業を行う。については、の作業によって継続的に柳田が組織化をおこなった地域に対して調査を行う。については、これまで先述した各時期(『郷土研究』、『民族』)によって独立性が強かったデータ・ベースを通史的に活用するための手段として、郷土史家、各地の研究会、地域を超えて継続的に行われた事業などをキーワードとしながら、各々の時期を有機的に繋ぐ事項から構成される別途のデータ・ベースを構築することにした。

については、「文書」によるデータ・ベースを基礎に、1943年秋以降休刊していた『民間伝承』が戦後、再刊されるにあたって、各地の郷土研究会と連絡を取り合った際の記録を手がかりに、それぞれの郷土研究会の復旧状態を確認して、(1)継続が確認できる地域、(2)戦後復興しなかった地域、(3)既存の研究会は復興しなかったが新規に別の研究会が戦後結成された地域、という形にそれぞれ区分して、全体の見取図をはかった。このうち、(2)については、柳田民俗学と直接関係がみとめられない郷土研究会が散見されたため、備考として敢えて算入することとした。その上で、戦後5年間に限定して各研究会の機関誌を閲覧し、必要に応じて複写をとって、戦後の(再)出発に際して各郷土研究会が何を目指し、どのような民俗・郷土把握を検討したのかを考察した。

また、既存の郷土史家とは別に、戦後の活動で目立った郷土史家の存在が認められる場合は、その人物の書籍で主要なものは購入することとし、それに付随しての調査において、対象となった郷土史家の残した書籍、主宰した研究会の機関誌などで復刻されているものがあれば、適宜購入して考察を行った。主たるものでは、新潟の『高志路』、飛騨高山の『ひだびと』、などである。

これに加えて戦後、新しく結成され、目立った活動を行った郷土研究会の刊行物、及びその中心となった郷土史家の書籍についても適宜資料として読み込み、それまでのデータベースに加えて資料照合を行った。

以上の作業の中で中心となったのは、書簡類の解読に伴うパソコン入力であるが、すでにこの仕事に数年来参画している大学院生(博士課程)2名の協力を得て作業を継続して行った。役割分担としては、画像の拡大印刷と日付のチェック、及びキャプションの作成に1名。他の1名は、解読した書簡内容をパソコンに入力する作業に従事してもらった。さらに、抽出されたキーワードによって既存のデータ・ベースの一部を通史的に再編するため、エクセルその他で技術に通じた大学院生(博士課程)のバイト1名を選んで専属とし、これらの基礎作業から、柳田民俗学が敗戦直後から1950年にかけて地方に対して何を契機に、どのような過程を経て浸透していったのかを大正末から通史的に検証できる状態にした。

4. 研究成果

本研究の成果は、『評伝 柳田国男 感じたまま』(ミネルヴァ書房 2019年)の多くの叙述の中に適宜、吸収されている。

戦後の柳田民俗学が組織(「民間伝承の会」)としてなぜ、早い段階から軌道に乗った活動が可能だったのか、その理由として、地方の郷土史家にとってお互いに似かよっている、あるいは微妙に異なっている民俗事例を提出できる環境を整えたことを指摘した。素材としては民謡、年中行事、その他の民間習俗など多岐にわたるが、一人の読者・会員が感じたことが、そのまま、他の会員の民俗に関する感覚を触発させる力となり、その無数の連鎖が会員同士のネットワークを形成、維持した遠因となったことを検証した。その意味で柳田民俗学は経験的な思考と各自の個性が生き続けた稀有の環境ということができる。

また、2019年6月に有島武郎研究会で行った研究報告「有島武郎と鳥取人脈」では、橋浦泰雄と有島武郎をとりまく環境が、橋浦の故郷鳥取出身の文士たちと深く関わっていたことを検証し、その時のネットワークは最終的に戦後にまで及んでいることを強調した。さらに同年8月に行った坂井市主催「くちなし忌」における講演「中野重治と柳田国男」では、戦中戦後と柳田が一貫して求めた「生活から生まれる論理的思考」に対し、中野が賛同を示し、そこに両者の一致点があったことに触れながら、同時に戦争を挟んで柳田が「民間伝承の会」で会員に求めた重

要な事柄のひとつが、まさに「生活の理法」すなわち日常から生まれる経験的思考だったことを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 鶴見 太郎 | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 柳田民俗学から見た津田左右吉 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 津田左右吉とアジアの人文学 | 6. 最初と最後の頁 59-77 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

| |
|--------------------------|
| 1. 発表者名 鶴見 太郎 |
| 2. 発表標題 有島武郎と鳥取人脈 |
| 3. 学会等名 有島武郎研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 鶴見 太郎 |
| 2. 発表標題 中野重治と柳田国男 |
| 3. 学会等名 第6回くちなし忌（坂井市教育委員会主催）（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|-------------------|-----------------|
| 1. 著者名 鶴見 太郎 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 370 |
| 3. 書名 評伝 柳田國男 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|